

第 637 回：【3-4 年生向け】研究で使うデータを集めて考察してみよう (MS)

みなさんこんにちは。水曜日担当の MS です。今回の LA 通信では、前回取り上げたデータについて塩濱 (2026) がどのように考察をしているのかについてお話しします。

前回の振り返りです。塩濱 (2026) は、ゲームの翻訳にみられる「オネエことば」(マリィ、2013) について、様々なツールを使い言語データを収集しました。データ内では女性的(cf. Okamoto, 1995) とされる一人称「アタシ」、助詞「わ」「の」等が一般的なのに、男性的とされる一人称「オレ」、助詞「だ」といった特殊な表現も使われていることに注目しています。

まず、塩濱はそうした特殊な表現が使われている箇所を観察しました。すなわち、特殊な表現が使われている状況証拠をもとに、それらが使われている要因を考察しました。すると、それらは一般的な状況とは異なる場面で使われていました。前提として、「オネエことば」で訳出されているゲイのキャラクターは、普段は英語版では裏声でしゃべっています。ですが、その人が何らかの要因で感情的になると、男性的な低い声を使います。そういった場面は、1. 生命の危機に立たされているとき、2. 自身の過去のトラウマについて触れられたときであると塩濱は考察しました。この英語版の男性的な音声への変化が、日本語字幕では男性的な表現への移行として規則的に訳出されていることを指摘しました。もちろん、ほかの視点から塩濱のデータを観察することで、ほかの発見ができるかもしれません。たとえば、“darling” や

“honey” といった英語の呼称はどのように日本語に翻訳されているのでしょうか。日本語ではあまり使わない類の語ですが、それをどのように翻訳しているのでしょうか。日本語だと不自然だから翻訳者が訳していなかったという可能性も、もしくは「ダーリン」や「ハニー」のようにカタカナで訳している可能性もありますね。こういった役割語の研究は、役割語は金水 (2003: 205) が言うように「人称詞」と「文末表現」において特徴的であるからして、それだけを見てしまいがちです。その点で、塩濱の研究は視野が狭いとして批判できます。

一般に、ヒトは何か注目していると、ほかの重要なことに気づきにくくなるということが指摘されています(Simons and Chabris, 1999)。ですので、卒論等で集めたデータについて考察する場合、異なる視点を持ち、何度もデータを読み返しながらかいていくことをおすすめします。

最後に、追加でデータ収集をして、既存のデータと比較するのも、研究をさらに進めていく手掛かりになることがあります。たとえば、塩濱は公式の翻訳を扱っていますが、非公式の翻訳ではどうでしょうか。もしかすると、異なる翻訳規範や言語的特徴がみられるかもしれません。このように、当初の予定にはなかったことを試しにやってみることも卒論の執筆に役立つことがあるかもしれません。よければ試してみてください。それでは。

第 637 回：【3-4 年生向け】研究で使うデータを集めて考察してみよう (MS)

参考文献

金水敏. 2003. 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』. 岩波書店.

Okamoto, Shigeko. 1995. “‘Tasteless’ Japanese”: less feminine speech among young Japanese women.” in Gender Articulated language and the socially constructed self. Kira Hall and Mary Bucholts (eds.) New York: Routledge. 297-325.

塩濱靖雄. 2026. 「「あれはアタシじゃない本当よ！…オレのワケねえだろ！」 —ゲームの日本語字幕翻訳にみられる〈オネエことば〉—」. 言語学フェス 2026 [ポスター発表].

Simons, Daniel J. and Christopher F. Chabris. 1999. “Gorillas in our midst: sustained inattention blindness for dynamic events”. *Perception* 28. 1059-1074.

マリィ, クレア. 2013. 『「おネエことば」論』. 青土社.